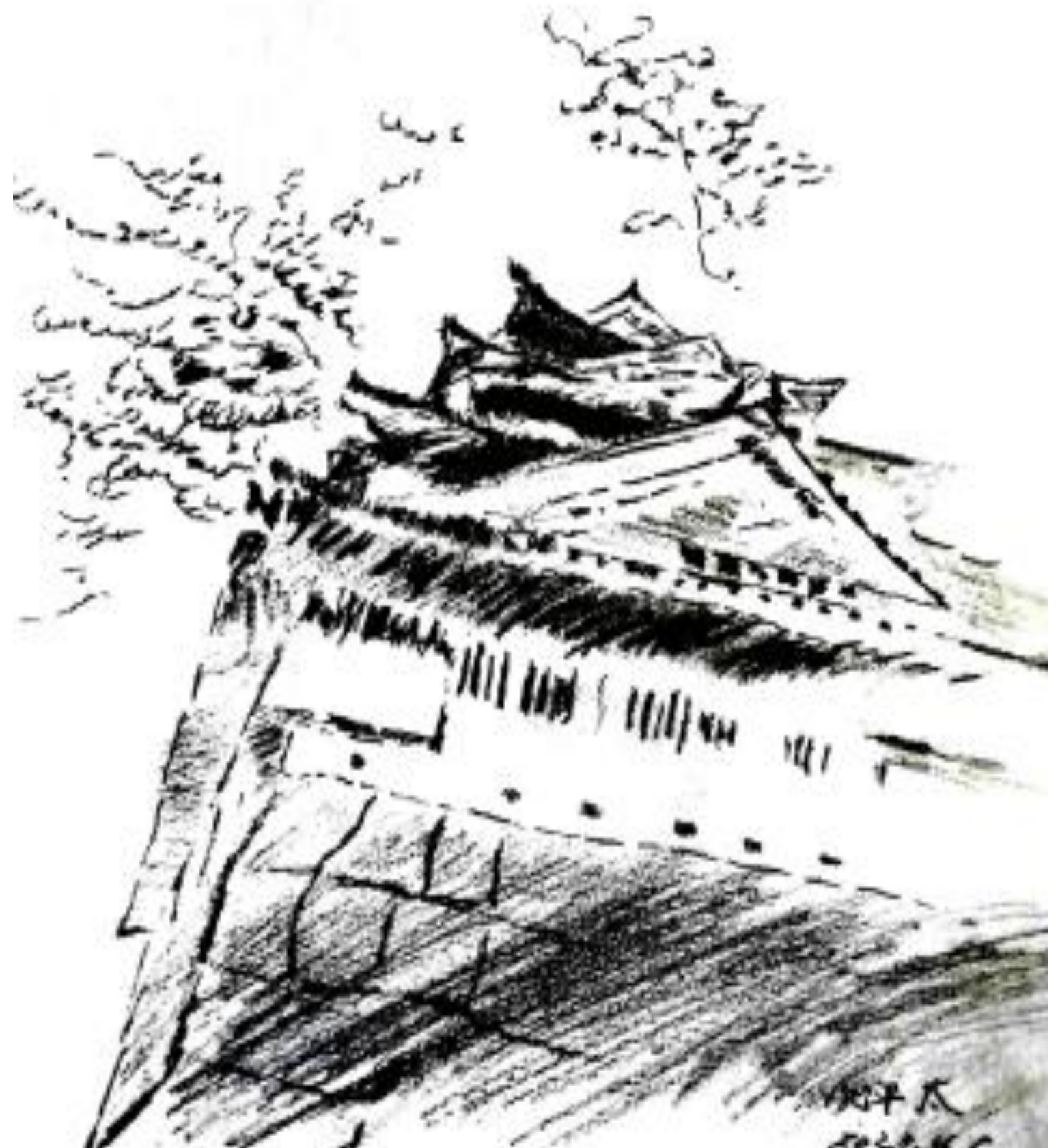


閣守天柳川

2025 年 5 月号



第24回例会 2025年4月15日(火) 投句締切分

お題 「透明」

加山勝久 選

透明な心に泥を塗る悪意

不透明な人の心を推し量る

澄んだ瞳の膜に映れるガザ地獄

風よりもピュア—な君の声が好き

目論見は空振り不透明な未来

透明なクラゲの心汚れなし

水温む川にわが足ほっそりと

透きとおるシロウオつるり踊り食い

磨かれて存在失くす窓ガラス

ちよつと休んで透明になる時間

透明な心に浸みる淡い恋

春の小川透明感が半端ない

透明か森友学園あの始末

永田町透明性欠く閨館

トランプの発言市況不透明

(五客)

佳5 透明と接し己の穢れ知る

佳4 幼子の透き通るよな輝く目

佳3 裏金が透明ならば表ざた

岡野とら丸

堀内きみ子

蔵内歳重

平川柳

波部珀兎

勘兵衛

三枝なな

波部珀兎

浜脇蓬生

林ともこ

東尾由子

信子

武智三成

佐野正邦

堀内きみ子

浜脇蓬生

松谷由夏

岩原一角

(三才)

佳2 ご褒美とバカラ張り込むマイグラス
佳1 透明度に固執するのも赤絨毯

松島きよみ
小林満寿夫

人 裏表無くて透明なる政治

井澤壽峰

地 主見えぬソプラノの声透き通る

久世高鷲

天 山深く透明な滝落ちる音

東尾由子

軸 政治資金半透明に受けて逃げ

加山勝久

(選評)

人の句

政治はなぜこのように倫理観がない人たちによって行われるのか、あるいはなぜ清濁合わせ飲むのが大政治家なのか、最近はそのような状態に慣れてしまいがちである人が大半です。裏表なく透明な政治を行う人を政治の舞台へ押し上げたいものです。

地の句

毎年12月になると近くの同志社女子大で、恒例のベートーベンの第九が演奏されます。合唱は近所のコーラスのグループや女子大生が半年以上の練習の成果を見せてくれます。圧巻はソプラノ、あの透き通るような声での独唱には魅了させられます。

天の句

私の故郷富山県には庄川、黒部川等7大河川が立山連峰を源流として、ちよろちよろ流れ小さな滝を流れ落ちます。水底には落ち葉が腐りもせず綺麗に沈んでいます。やがて川は少しづつ大きくなり、やがては大河川になり日本海へと流れ込みます。「山深く透明な滝…」は源流に近い滝を思い起こします。

お題 「一緒」

久世高鷲 選

一緒に笑い一緒に泣いて共白髪

困ったら母の言葉を思い出す

薫風と一緒にいますみどりの日

手を取って二人で見てる花筏

黄昏れた夫婦立たせている湖畔

星空の下で一緒になろうプロポーズ

夫婦円満一緒にいない事らしい

付かず離れず補い合える友がいる

ままごとと一緒にした娘も早や米寿

もう少し二人羽織を着ていたい

頼んでも一緒になれない老いの愛

ご一緒はしても心は近づかぬ

(五客)

佳5 ご一緒に待ってましたと独り者

佳4 支え合い一緒になって人となる

佳3 次の世のきつと一緒にクエスチオン

松谷由夏

青空

直子

直子

小林満寿夫

武智三成

波部珀兎

三枝なな

加山勝久

真鍋心平太

東尾由子

岡野とら丸

佐野正邦

平川柳

山野寿之

(三才)

佳2 月光と一緒に眠る春の宵

佳1 鬱憤と一緒に丸め投げ捨てる

人 一緒なら乗り越えられる荒い海

地 ときめきも一緒に抱いた新刊書

天 火をくぐり君と一緒に道をゆく

軸 念願の想い思われ添い遂げる

(選評)

人の句

荒い海と言う比喻が、人生の困難や、不安を象徴。

波風の中にあつても、誰かと共にいることの強さ

安心感の現れを表現されている。

地の句

新刊書を手にした瞬間の高揚感が、

自分だけの特別な時間の始まりを感じさせてくれます。

本を買って胸に大切に作る姿が、目に浮かぶ。

天の句

火を潜ると言う強いイメージが、困難試練を象徴している

そして君と一緒にをと優しさが強く潜んでいる。

春田敏晴

松谷由夏

林ともこ

船木しげ子

浜知子

久世高鷲

お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

米中露地球を勝手に切り刻み

クスクスひそひそ真夜中の理科室

年重ね老いる覚悟で気持晴れ

回り道無駄にはしない玉の汗

世間から魔法のように米が消え

驚愕の100番稽古大の里

差し入れの牛丼になる午後六時

SFの世界未来へ一っ飛び

良心の呵責影さす今日の空

トランプにすごまれすくむ我が総理

麗しい助け合いにもある打算

不器用な手でも美味しい塩むすび

年金日生きる心配死ぬ心配

(五客)

佳5 お隣の暮らしがわかる換気扇

佳4 春風が癒やしてくれるのは別れ

佳3 万博で未来の自分見る勇氣

佳2 こんなが好きやったんや野良桜

加山勝久

浜知子

東尾由子

佐野正邦

浜脇蓬生

波部珀兎

武智三成

井澤壽峰

久世高鷲

岩原一角

岡野とら丸

松谷由夏

春田敏晴

松谷由夏

信子

勘兵衛

秋田あかり

(三才)

佳1 臨月の河馬が地球になる夜明け

平川柳

人

欲しいもの何にもなくて夕茜

直子

地

痒いのも痛みも生きている証

山野寿之

天

湯豆腐の欠けらを掬うのも独り

小林満寿夫

軸

玉音放送は天皇の遺言

真鍋心平太

(選評)

人の句

欲望に身もだえすることのない悟りの境地だろうか、夕茜の向うに静謐な心映えが見えるようで清々しい。

地の句

年齢を重ねて体のあちこちが傷みはじめるのだが、それこそが生きている証だという人生へのエールの句。痛みよりも痒みが前にあるところが実感句である。

天の句

湯豆腐と言えば南禅寺総本家奥丹の湯豆腐が絶品ながらいつ行っても行列でなかなか食べられない。その欠けらを独りで掬う、という心意気を頂いた。

お題 「増える」

互選

1点

共白髪増えて番の愛も増え
山火事が増えて乾燥注意報
値上げ前酒を買い溜め酒量増え
会員が増えたらいい天守閣
彼方此方の紛争に怒り増大
新しい言葉が増える皿の上

町会も忘れん坊が増えたよう

アメリカは悪あがきで断末魔

メタンガス産地が増えた喜ばし

愚痴の増え潮時ですな暇乞い

黒白が逆転すればロマンスグレー

旬の食材あれこれアレンジ多種多彩

諦める数は増えたが武器は年

正夢になるかお金の増える夢

少子化の時代我が家の子沢山

増えていく物覚えより物忘れ

トランプの悪癖増えてどないなる

物価高食費が増えて身が細る

子育ての増える苦労に対峙する

断捨離で山積みになるゴミ袋

年金は減るが増えてく保険料

2点

3点

久世高鷲

林ともこ

浜脇蓬生

真鍋心平太

蔵内歳重

直子

武智三成

岩原一角

岩原一角

松島きよみ

浜脇蓬生

波部珀兎

三枝なな

佐野正邦

井澤壽峰

松谷由夏

武智三成

岡野とら丸

久世高鷲

松谷由夏

井澤壽峰

4点

友達はスマホ増えていく孤独
フエイクニュースに惑わされるイワシ
千成のひょうたん目指し天守閣
増えた友一人二人と空の上
山野寿之
小林満寿夫
波部珀兎
佐野正邦

すっかりが弛みうっかりばかり増え

独り言増えて春だなあと思う

持て余す小銭を消化セルフレジ

玉ねぎが増えた牛丼のトッピング

卒寿迄生きても積読読み切れず

羊たち夢で逢うまで増え続け

物欲も食欲も減り増える皺

赤のれん酒が言わせる愚痴の数

物忘れ増えても生きるケセラセラ

カード増え覚えきれないパスワード

薄情な時代に増える事件事故

子を産まぬ才女ばかりが何故増える

戦いや死者と悲しみ増えるだけ

10点 哀しみが増えた分だけ甘い桃

物忘れ笑い話がまた増える

12点 無人機が増えて終わりのない戦

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。

得点が空白のものは前行の句と同得点です。

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。

得点が空白のものは前行の句と同得点です。

得点が空白のものは前行の句と同得点です。

お題 「器」短句

互選

1点

大谷の器は底知れぬ
干からびだした加湿器を買う
人の器を図られる難

暴言を吐く軍事ドローン

貧乏招く器用な手先

鑑定怖い土蔵の器

趣味を終わらす骨壺二つ

器用貧乏手相でわかる

質より量と孫に大盛

お洒落な器男が惚れる

偉大な器量努力もの言う

器を決めて立ち上がる朝

俺は名器だ山盛りやめろ

ぬる爛二分知った徳利

大器晩成もう五十過ぎ

からっぽの容器のでかい音

春が来ました洗面器にも

一枚のサラ朝を載せている

女の涙喜も哀も武器

割った器に未練たらたら

久世高鷲

松島きよみ

松谷由夏

小林満寿夫

平川柳

岡野とら丸

三枝なな

東尾由子

青空

東尾由子

波部珀兎

直子

三枝なな

武智三成

青空

秋田あかり

真鍋心平太

信子

山野寿之

浜脇蓬生

4点

陶器市まで風が道連れ
花器に負けたと頂垂れる花

南海トラフお椀の中で

寄付をして知る自分の器

度量で決まる器も人も

6点

夕日いっぱいグラスに注ぐ
深いふところ溺れそうです

器の中は山盛りの愛

7点

皿一枚に盛るひとり膳
白い器に盛りつける春

不器用だけどわたしを生きる
紅を噛んでる不器用な嘘

砂の器に入れたにんげん

聞き上手にも飽きた補聴器

12点

持たせてならぬ少年に武器

船木しげ子

松島きよみ

浜知子

浜脇蓬生

平川柳

浜知子

真鍋心平太

直子

林ともし

林ともし

秋田あかり

春田敏晴

春田敏晴

船木しげ子

山野寿之

今月の投句者（28名 敬称略）

井澤壽峰 加山勝久 蔵内歳重

山野寿之 岩原一角 信子

平川柳 三枝なな 林ともし

秋田あかり 久世高鷲 直子

勘兵衛 波部珀兎 浜脇蓬生

堀内きみ子 佐野正邦 東尾由子

春田敏晴 松島きよみ

武智三成 小林満寿夫

岡野とら丸 真鍋心平太

松谷由夏 青空

船木しげ子

浜知子

皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。

川柳天守閣 連載評論「現代川柳の詩学」を考える ⑬

明治最初の川柳入門書―短詩型文学としての川柳の韻律
十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平 川柳（東京川柳会主宰）

明治十五（一八八二）年七月、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎撰で『新体詩抄』（初編）が刊行されました。

その「序」で外山正一は「近世に至り皆三十一文字や川柳」などの「短詩」は「其内にある思想」は「極めて簡短なるものたるは疑い」なしと述べ、「無体なる申分」かもしれないが、「三十一文字や川柳など」の「思想は線香烟花か流星位の思想」に過ぎないと断定しました。

外山正一は明治時代においては西洋の「長詩」の形式を用いて「連続したる思想」を表現できる「新体詩」と称する西洋風の「長詩」を創作することを提唱しました。

外山正一らが目指した西洋の「長詩」の典型は英国の劇作家シェイクスピアの悲劇『ハムレット』でした。

シェイクスピアの悲劇は「ブランク・ヴァース」と呼ばれる「長詩」の韻律で作られていましたが、矢田部良吉は『ハムレット』の「独白」を「ながらふべきか、ただし又、ながらふべきにあらざるか」と歌舞伎の台詞のよ

うな「七五調」で翻訳しました。

日本近代文学史では『新体詩抄』は西洋の「長詩」を翻訳にて紹介した「近代詩の先駆け」と言われていますが、森鷗外の『於母影』^{おもかげ}や島崎藤村の『若菜集』が登場し、日本の「近代詩」は確立されたといわれています。

明治時代に和歌・俳諧・川柳の「短詩」を創作していた若い作家達にとって、この『新体詩抄』の「序」は大きな刺激となり、若い短詩型の作家たちは、それぞれの「短詩」の分野で〈近代化〉を試み始めました。

正岡子規は新聞「日本」で「和歌」を「短歌」と呼び、また「俳諧」を「俳句」と呼び、明治時代以前の「短詩」を〈近代化〉していききましたが、「川柳」は正岡子規の「短詩」の革新運動の強い影響を受け、井上剣花坊が「川柳」の革新運動を新聞「日本」で展開していきました。

川柳宗家の「柳風会」による「狂句」が明治三十年代初めまで大きな力を持ち、新聞や雑誌の「狂句」欄の選者は「柳風会」の川柳宗家が担当。例えば、読売新聞の「時事川柳」欄の最初の選者は川柳宗家が選をしました。

後にこの欄は井上剣花坊が選者となっています。

『新体詩抄』が刊行された十年後の明治二十五（一八九二）年十二月に文学叢書第四編として柳坡粹史半澤政平著『川柳作法指南』（頴才新誌社出版部）が刊行されました。この本は明治時代に書かれた最初の川柳入門書であり、川柳入門書の嚆矢といわれる重要な川柳書です。

この本の「序」で著者は江戸時代の「狂句」には「家元」と称する川柳宗家が存在しましたが、初世・柄井川柳の時代には、そのような「家元」という意識はなく、「川柳」は庶民の文藝として当時の人々に愛された庶民のための江戸の「短詩」文藝でしたと語っています。

この川柳入門書では明治時代の「川柳」は「狂句」と称される以前の「柳祖」といわれる「柄井川柳翁」の〈文藝精神〉を復興し、「短詩型文学」としての「川柳」の作り方を紹介しています。特にこの川柳入門書では江戸時代の「庶民文藝」としての「古川柳」に対して明治時代の「新川柳」は「日本文学」の一分野として位置づけているところに著者の見識の高さが認められます。

この著書では最初に「川柳の起源」が紹介され、次に

「川柳の目的」が述べられ、続いて「川柳の調格（正調）」が、どのようなものを説明しています。

今日の川柳の入門書では川柳における定型の「正調」は、いずれも「五七五」の「十七音」と書かれています。この川柳入門書では川柳における定型の「正調」は「七五五」の「十七音」と規定されています。しかも「変格」（破調）として「五七五」が取り上げられています。いずれも例句は『俳風柳多留』に収録されている「川柳」があげられています。初世 柄井川柳の選句集『俳風柳多留』の初篇では「七五五」の句は一句しかありませんでしたが、前句を省いて一句の独詠句となり、会話体が増え、十五篇あたりから収録されている「川柳」の韻律は「五七五」の韻律よりも「七五五」の韻律の句が多く収録されており、この川柳入門書では「古川柳」の定型韻律（正調）を「七五五」であると述べているのです。

古川柳研究家の阿達義雄博士の博士論文『江戸川柳の史的研究』（風間書房、一九六七年）では第八章の『「柳多留」における頭重型の川柳点』で「七五五」の韻律について詳細に考察されています。

（続く）

「文学とは」

真鍋心平太

藤枝静男は不屈の意思に貫かれた私小説家であると同時に、眼科医である。正岡子規、堀辰雄の文学が描写自身が描いた病の世界であるのに対し、藤枝静男の作品は医者の目で見た世界である。「悲しいだけ」は妻の死の前後を描いたものである。長くなるが一部を引用する。

《私と妻との結婚生活は三十九年間で会ったが、妻の健康だったのは最初の四年間だけで、戦争末期に肺結核を宣告された後の三十五年間は、多少の小休止が挟まれた以外は、八回の長期入院と五回の全身麻酔手術と胸郭成形術と肺葉切除術と気管支の硝酸銀塗抹、それから乳癌の発見と摘出、そして再三にわたる転移。背中と脇腹には太いミミズのように盛り上がったケロイドが走り、胸は乳房を切り取られて扁平となっている。最後にはがん性腹膜炎によって生を奪われたのである。死期が近づいて全身の衰弱が訪れた頃の妻は、腹水の貯留のため仰臥も横臥も出来なくな

った体を、折りたたんで重ねた布団やまくらに持たせかけた姿勢で昼夜を過ごしていた。時折は細い項^{うなじ}をうつむけ、絶えずふらつく上体を両手で支えて、小学生時代の唱歌を小声で歌っていることがあった。うつむいたままの顔を僅かに動かして「こうしていると気がまぎれるのよ」とつぶやいた。竹の筒のように痩せた首に数条の太い横皺が寄り、乾いてざわついた皮膚は垢で黒ずんでいる。その低い歌声が、動かしがたい運命の悲しみから無意識に逃れようとする一筋の細道のように思われた。妻の苦痛から身を剥がす方法は私にはない。剥がそうとも思わない。私が妻のベッドの側で煙草をのんでいると「私にも下さい。喫んでみる。」と言って唇に加えて二、三回ふかし「おいしい」と微笑した。》

結核、及び癌を病んだ女に一ト時訪れた安息。まるで彼岸の浄土から光が差して来たような一瞬だ。

当節、名声とお金のために作家になろうとする傾向にあるが、文学とは本来、この妻のように、人の苦痛が一ト時の慰めを求めて手を伸ばすものである。

第25回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「路地裏」 山野寿之 選
「モデル」 土井直子 選
「きっかけ」 互 選
「雑詠」 真鍋心平太 選
「事件」(短句) 互 選

(投句 各 2 句)

投句料 3 回につき 1000 円

(請求書メールが届いたらお支払い下さい。)

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は
下記 URL から可能です。

<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。

会員登録は下記 URL より

https://tensyukaku.com/id_make.php

スマホは下記 QR コードから

投句開始 2025年5月9日(金) から

投句締切 2025年5月15日(木) まで

互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。

5月16日(金)～5月19日(月)

披講発表 4月20日(火) から随時閲覧可能になります。



投句・閲覧



会員登録

鉛筆+パステル画

今月はお休みを頂きます。

携帯 080 (2672) 4446
Tel・fax 077 (532) 4211

川柳天守閣

サンルシエル大津607号室

滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

TEL 520-0054

(事務所)

(編集人 真鍋心平太)

(発行責任者 真鍋心平太)

ウェブ川柳天守閣会報

二〇二五年四月二五日発行